

移動教室で得た学びと自信

一般社団法人 まなびの森

代表 坂本 一さん



仮設住宅の集会所で行っている移動教室の様子(提供:まなびの森)



学習塾の経験と実績をもとに、震災後に学習支援活動を開始し、法人化した。学び舎を巣立った塾生たちがスタッフとして舞い戻り、被災した子どもたちに寄り添いながら学習環境を取り戻していった。活動に対する意義と自信がスタッフを成長させ、地域の信頼にもつながっている。



坂本一(さかもと・はじめ)
大学卒業後、企業に就職。3年弱で退社し宮城県南部に帰郷。学習塾を立ち上げ20年間営んできた。震災後は学習塾を動力源に学習支援活動を継続している。また、高齢者福祉系NPOの事務にも従事している。

2012年4月、坂本さんは…

宮城県角田市で20年間、小中高校生を対象とした学習塾を運営している坂本一さん。日中は宮城県大河原町で高齢者と障がい者を対象とした自主事業と公的事业を行うNPO法人ほっとあいの運営にも関わっている。坂本さんは震災前から、仙台から離れた宮城県の郡部における義務教育の学習到達度が低いことを危惧していた。

東日本大震災では、運営する塾の一つである角田教室も被災し一時閉鎖。10日後に教室を復旧し、近隣の学校が再開される4月中旬まで地域の小中高校生に教室を開放した。山元町で関わっていた避難所の方々から「子どもたちの勉強をみて欲しい」という要請がほっとあいに届いたことがきっかけとなり、坂本さんは山元町での活動を開始する。その後津波で被災した地域の惨状を目の当たりにした坂本さんは、子どもたちの心に寄り添う活動を長期間に渡り続けることを決意する。

山元町での活動には、塾の卒業生でもある若手スタッフの木田巧さんと細川修さんも加わり、3人で「居場所づくりから始めよう!」と動き出した。そして仮設住宅の集会所でまなびの森として移動教室を開くようになった。

しかし、坂本さんは若手スタッフを雇用したものの、彼らの暮らしが成り立つような運営ができるか大きな不安があった。相談できる人もまったくいない状態で、何よりも進もうとしている方向性が正しいのか、どう判断したらよいのかわからなかった。

坂本さんの取り組み

■ 法人として整えるべき体制、やり方の工夫など学びは大きかった

まなびの森は、2011年12月に一般社団法人として法人化した。有給スタッフも増え、事業規模も大きくなり始めた頃、育成・強化プロジェクトの集合研修が始まった。「法人として整えるべき体制、会計、労務のことや法令で義務づけられていること、その工夫など、学びは大きかった。そこで学んだことをベースに実務を進めていき、気になっていたことが一つひとつ整い始めた」と坂本さんは印象を述べる。ただし、研修でもその大変さが語ら

れていた資金繰りには坂本さんも苦労した。仮設住宅の移動教室の経費は助成金を充てていたが、その他に、初めて文部科学省の委託事業に採択され、半年で900万円の事業費がついた。ところが、委託費が振込まれるまでどうやりくりしても資金がつかないことで困っていた。そんな時に育成・強化プロジェクトの全体合宿があり、茨城NPOセンター・コモンズの横田能洋さんと話をしたところ、日本政策金融公庫のつなぎ融資を勧められ、その後融資を受けられるようになった。

■ 自分たちの立ち位置を意識し、実感できるきっかけに

学習塾では、教室という空間のなかで生徒とスタッフが向き合い、目標を目指して勉強に励んでいる。しかし、この仮設住宅での移動教室は外から見た時にどう見えるのかはまったくわからない状態で、ひたすら自分たちが必要と信じて取り組んできたという状況だった。

その頃、集合研修に続いて実際されたメンターサポートプログラムで坂本さんはメンターのいしかわ市民活動ネットワークセンターの青海康夫さんと出会った。坂本さんは「この時は、確か具体的に何かを褒められたわけではなかったけれど、自分たちの現場にわざわざ活動のことを聞きに来てくれたこと、そのこと自体が刺激になった。スタッフ全体で共有し、自分たちが取り組んでいることに誇りをもっていいんだ、という実感を得たことを覚えている」と当時を振り返る。

■ メンバー間の自主情報交換会が励みに

育成・強化プロジェクトの15の力の集合研修で生まれた県内NPOのネットワークを活用する目的で、参加メンバーが主体となって情報交換会を実施した。宮城ではメンバーが関係する拠点や現場を訪ねて情報交換を行った。坂本さんが運営している大河原教室に2度ほどメンバーが集まった。集合研修は月2回開催していたので、メンバー同士は自然に「同じ釜の飯を食った仲」という感覚になっていたのか、その後の情報交換会でしばらくぶりにメンバーに会うと安堵の表情を見せていた。坂本さんも同様に、「メンバーには一定期間をあけて会うんですけど、それまでの経過とか背景とかいちいち説明しなくてもよくて、会ってすぐに『今こうなんだよ』って話が



宮城の参加メンバーで気仙沼に集まった情報交換会

できる関係がすごくいい。それぞれみなさん前向きに頑張っているので、『こういうふうに頑張っていけるんだ』って励まされている」と感じていた。

成果と変化

■ 移動教室が、住民にとって「なくてはならない」存在に

山元町には山下中学校と坂元中学校があり、それぞれ3つの小学校区と2つの小学校区から生徒が通っている。まなびの森が山元町で学習支援活動を始めたのは、2011年6月。旧坂元中学校跡地仮設住宅の集会所で毎週金曜日に開く通称「移動教室」だった。この仮設住宅は、山元町で最初に入居が始まったところで、同町の中浜地区300世帯で被災した79世帯が入居した。同地区は、海岸から200メートルのところにあった小学校を残して周辺の家屋はすべて津波に流されてしまった。坂本さんやスタッフは、仮設住宅で暮らす孫を気遣うおばあさんや子どもの様子を気にかける保護者の声を耳にしていたこともあり、移動教室に顔をみせる子どもたちの様子を見守り、寄り添いながら学習環境を整えていった。常勤1名と学生アルバイト2～3名のチーム体制で臨機応変な指導スタイルをとっていった。

2012年の春には、あそうはら浅生原・内手の仮設住宅で毎週

木曜日に、浅生原・東田の仮設住宅で毎週月曜日に「移動教室」を開設し、現在も3ヶ所で継続している。

坂本さんいわく、「スタッフの木田は、試行錯誤しながら、自分で考えて場をつくっていました。自分たちでやっている場づくりが外からどう見えるのか、正直わからなかった。青海さんにお会いし、取り組みに対して反応を示してもらえたこと、自分たちがやっていることがどうやら意味のあることらしい、と気づかされ本人のやり甲斐につながったようです」

移動教室は、仮設住宅の集会所で行っているもので、塾の環境とは違ってあまり落ち着かず、生徒は集まっても雑談をしがち。木田さんは、毎回席の配置を変えたほか、スタッフと生徒の向きあい方も工夫した。すると雑



仮設住宅の集会所で行っている移動教室の様子（提供：まなびの森）

談は少なくなり、話をしても勉強に関することに変わっていった。結果的に問題を解く量が増えて、制限時間前に回答し終わる生徒が多くなった。そして何より移動教室で学ぶ生徒たちも成績が上がり、喜んでいる姿を目にすることが多くなった。木田さんいわく、「ようやく移動教室がまなびの森の“色”になってきたかな。塾にいる時と同じように生徒に接していけるようになった。スタッフの人数が少なくても、教室を回せるモチベーションはスタッフ全員がもっている。現場で鍛えられました」。

一ヶ所目の移動教室の開設から3年が経過。「今ではなくてはならない存在」と、生徒からも保護者からも、そして学校の先生からもスタッフに寄せられる信頼と期待は大きい。

■ 塾本体にも好循環、現場マネージャーも育つ

「もともと運営していた角田の教室に、人が絶え間なく来るようになり、経営的にも好循環が見えてきた。自分たちがやってきたことが少しずつ伝わってきているのかなと実感することがある。ある高校生が『自分が中学生の時に、まなびの森がほしかったよ』と言っていたそう

だ。スタッフに対する信頼感や憧れや尊敬の念を持ってくれている話なども耳にする」と坂本さん。

坂本さんは、おもに現場の初動や資金繰りを担当して、そこから先の現場の運営や仕上げは、すべて細川さんと木田さんに任せている。「二人はきちんと受け取ってくれて、自分の裁量と責任で仕事をし、それに必要な外部との折衝も彼らがやっている。こちらには事後報告のみ。何か問題が発生した時はすぐにくるけど、日常的な運営に関してはすべて任せている」と言う。現場マネージャーが育ってきていることは貴重なことで、学習塾という業態で、自分たちのもっているスキルを世の中に提供した時に何が起るか、地域のなかでの手応えを感じている。社会に何が必要で、地域で何が足りないのか。そういう視点から発想ができるようになってきている。坂本さんは、「それが面白くなってきたのだと思う。そういうことに取り組んでいるのは地域では自分たちだけだし、パイオニアになっていける」と語る。

■ メンターとの出会い

メンターの青海さんが現地を訪問して以来、坂本さん



文系教科を中心に、中学数学も教える木田巧さん（提供：まなびの森）

とスタッフとのいい関係は続いている。サポート期間が終わってから、坂本さんとスタッフ5名で金沢へ青海さんを訪ね研修ツアーを決行。青海さんの存在は、坂本さんや若手スタッフに大きな刺激と影響をもたらした。

スタッフの木田さんは、「初対面の時は一体何者なのかと思ったが、いい意味でピュアな大人。自分は仕事柄、子どもとつきあっているのに、変に大人ぶらず子どもと同じ目線に立って仕事の方がいいのかなって、青海さんにお会いして感じました。今まで出会ったことのない大人。坂本代表も他にはいない大人だと思う。タイプが似ているのかな」と言う。

さらに、「自分たちがどう変わったか青海さんに見てもらいたい。去年金沢に行って帰ってきてから、あんまり意識していなかったが、気持ち的にスッキリした感じがする。生徒がよく話しかけてくるようになったり、遊びの話もするようになった」。

坂本さんは、スタッフの様子や教室にくる生徒たちの姿を思い返し、「育成・強化プロジェクトのおかげで10年後には大きな違いがでているだろう」と感想をもらしていた。

これから

今後の展開について、坂本さんは次のように語る。「2014年4月から角田中学校で行っている、緊急スクールカウンセラー等派遣事業(文部科学省委託)で、保健室登校の生徒が学校に来るようになった。どうやって継続していけるか、しくみづくりを考えていかなければならない。また生活困窮家庭の支援事業で自分たちの得意な部分を事業化していけるか、まずはニーズを調べてから、しくみにできるか考えていきたいと思っている。もう一つは、学校の中の学習室も成果がでるものであれば市町村へアピールしていきたい。事業の広がりとおわせて昼と夜のスタッフを分けながら対応を考えなければならない。今年の高校3年生で、地元に進学できればまなびの森を手伝うと言ってくれる子どもたちがいる。ここで育った生徒たちが、いずれこの地域の子どもたちを育てていくような循環が生まれてくるといいなと思っている」。



英語を中心に教える細川修さん(提供:まなびの森)

小林 雅美さん（移動教室〔旧坂元中跡仮設住宅集会所〕に通っている生徒の保護者）

移動教室が始まって、長男が中2で通い始めたのがきっかけ。うちは4人家族で2部屋しかなく、仮設のなかで落ち着いて勉強ができる状況ではないので、週何回かまなびの森さんで勉強をみてもらえるだけでも助かっています。

スタッフの細川さんは、息子と年が近いので相談しやすいみたいです。私も初めての受験で何もわからず、特に受験体制が変わったところだったのでいろいろなことにアドバイスしてもらってすごく助かりました。ここに通い始めてから勉強の仕方が変わり、何よりも成績が上がりました。精神的にも受験に向かっていけたのかな。最初の1年で終わってしまうのかと思ったけれど、今もまだ続けてもらえてありがたいです。

咲間 透さん（宮城県山元町立坂元中学校 教諭）

震災後、坂本さんから本校へ学習支援のお声がけがあり、それからおつきあいが始まりました。震災の影響で2週間ほど授業の開始が遅れましたし、先生方も授業の準備がままならない状況でした。学校としても学力向上に力を入れていこうと取り組んでいましたので、大変ありがたいお話でした。仮設住宅の集会所での学習支援に始まり、その後は校内で放課後の自学教室、公民館で3年生対象の土曜ゼミ、冬期講習の学習支援など相談しながら進めていきました。生徒の様子が気になる時など、放課後の時間にまなびの森さんのところに顔をだして生徒の様子を共有しています。生徒の何かしらの変化を教えていただけるので、状況に応じて進路指導にも参考にさせてもらっています。



坂本さんにとっての「市民活動」とは何ですか？

かつては遠くで眺め見送るものでした。今は日々の暮らしや仕事のなかに組み込まれているものです。



【団体プロフィール】

一般社団法人 まなびの森
〒981-1505 宮城県角田市角田字扇町5-3
TEL. 0244-64-5248
URL. <http://www.s-1.jp>
代表 坂本一
設立 2011年（法人格取得 2011年）

●団体概要

東日本大震災の直後に新しい教室を立ち上げ、同時に地震と津波で被災した山元町を中心に学習支援活動を開始。小中学生を対象とした応急仮設住宅の集会所でのまなびの森の「移動教室」、山下中学校と坂元中学校の放課後学習支援教室、中学3年生の受験対策として土曜ゼミや春夏冬の講習を行っている。また角田市と大河原町では小中高生を対象とした学習塾を運営している。

●2013年度

運営体制：役員3名、スタッフ22名（常勤有給7名、その他15名）
収入総額：41,967,044円